東京新聞　2月16日付

花見川・新川を大きな遊び場に

千葉、八千代、佐倉市など　魅力アップへ連携

東京湾と印旛沼をつなぐ花見川、新川の流域の魅力を高めようと、千葉、八千代、佐倉市などが15日、連携協定を結んだ。二つの河川流域を「千葉うみさとライン」と命名し、海と川の水辺、里山などの自然を生かし、誰もが楽しめる「大きな遊び場」づくりに取り組む。利根川までの関係自治体などにも参加を呼びかける。（保母哲）

流域命名「うみさとライン」

連携協定を結んだ3市の市長ら

協定を結んだのは3市のほか、都市再生機構、エリアマネジメント会社・みなも（八千代市）の計5者。協定締結式は、やちよ農業交流センターで行われ、神谷俊一・千葉市長、服部友則・八千代市長、西田三千五・佐倉市長らが書面にサインした。

新しいライフスタイル提案

3市長は「広域連携することで、魅力的なエリアにしたい」と歩調を合わせ、流域のブランド化を進める「ブランディングプロジェクト」として取り組む。西田市長は印旛沼と新川を舟で結ぶことを提案。「将来的には千葉までつながればいい」と述べた。

流域ではカヌーやカヤック、サイクリング、釣りなどを楽しむ人がいることから、こうしたアクティビティー団体とも連携。協定を結んだ5者などとともに4月、協議会を設立し、本格的な活動を始める。

現在の計画では、連携イベントの開催、ネットワークづくり、交流サイト（SNS）やリーフレットによる情報発信を行う。東京都心からほど近く、自然が豊かなエリアであることから、外部から人を呼び込むとともに、3市長は「新しいライフスタイルを提案できれば」などと話した。

二つの川つなぐ「印旛放水路」

花見川につながる新川。右奥は大和田機場＝いずれも八千代市で

メモ

千葉市側の花見川と八千代市側の新川がつながっているのは、印旛沼の水を東京湾に流す「印旛放水路」として建設されたため。利根川が増水するなど、印旛沼の水位が上昇した際、ほぼ中間に設置された揚水施設・大和田機場（八千代市）のポンプ排水で花見川に水を流し、東京湾に排水している。

歴史をさかのぼると、印旛放水路が建設されたのは江戸時代、江戸の町（現在の東京）を洪水から守るため、利根川の流れを東に変えた「利根川東遷」がきっかけだった。利根川は太平洋に注ぐようになったものの、水量が増えたため、印旛沼一帯は水害が頻発。

放水路の建設計画は江戸時代、何度も失敗し、明治時代にも計画されたが実現しなかった。戦後に工事が進み、1968（昭和43）年にようやく完成した。

読売新聞　2月18日付

うみさとライン PRへ連携協定

3市など

千葉、八千代、佐倉の各市と都市再生機構（UR都市機構）などは、東京湾から印旛沼まで約30キロにわたる花見川・新川流域を「千葉うみさとライン」と命名し、共同でPRする取り組みを始めた。「自然と暮らしが融合する大きな遊び場」となぞらえ、官民一体でイベントを開いたり、情報発信したりしていく。

15日に八千代市内で連携協定を結んだ。4月には市民団体からも参加を募り、協議会を設置する。

事務局を務める会社「みなも」（八千代市）によると、流域には「道の駅やちよ」や県立八千代広域公園などがあり、サイクリングやランニング、釣り、カヤックを楽しむ市民が多い。花見川千本桜や新川千本桜、佐倉ふるさと広場のチューリップ畑など花の名所も多く、市内外から行楽客が訪れる。

今後、各市や同機構などは、連携してイベントを開催し、SNSやパンフレットなどでPRしていく。流域のブランド化を図り、にぎわい創出や地域活性化につなげる考えだ。

千葉市の神谷俊一市長は協定の締結式で、「流域の良さを知っていただき、多くの人々に訪れていただきたい」と語った。

「千葉うみさとライン」をPRする3市の市長ら（15日、八千代市で）

千葉日報　2月19日付

命名「うみさとライン」PR

花見川・新川流域 魅力向上へ

千葉・八千代・佐倉の3市を流れる花見川と新川周辺の魅力を高めようと、3市と民間2事業者が連携協定を結び、流域30キロを「千葉うみさとライン」と命名した。共通のホームページ（HP）や案内冊子を用意。サイクリングやカヤックなどの団体の協力も受けて自然を生かした遊びをPRし、季節の催しに合わせて水辺に憩いの場も増やす。

上八千代市の新川に沿って咲く河津桜　左春に70万本のチューリップが咲く佐倉市の佐倉ふるさと広場　右下カヤックが楽しめる千葉市花見川区の花島公園（各市提供）

千葉市の区名にもなっている花見川は、八千代市で新川とつながり、印旛沼の水を東京湾へと流す放水路の役割を果たしている。両川の流域にはサイクリングやカヤックが楽しめる花島公園（千葉市花見川区）、川沿い9キロにわたって咲く新川千本桜（八千代市）、風車の前に70万本のチューリップが咲く佐倉ふるさと広場（佐倉市）など、観光資源が点在している。

3市連携 民間も協力

3市はこの水辺の自然や、そこで楽しめるレジャー・スポーツを活用した地域ブランド力の強化を進めており、昨年、河川を生かした一体的なまちづくり計画として国土交通省の支援制度に登録された。

今月15日、新川のほとりにある八千代市農業交流センターでの記者発表会に3市長が集まり、UR都市機構、エリアマネジメント会社「みなも」（八千代市）の2事業者と連携協定を結んで「うみさとライン」の命名を報告した。海と里山の生活文化を川がつなぐという意味を込めたという。

うみさとラインのHPや冊子を通じ、流域イベントの告知を集約して行う。今春から早速、花見川の季節などには川沿いに野外席「うみさとテラス」を設置し、集まるキッチンカーなどの食事を楽しみながら憩える環境を整備する。

千葉市の神谷俊一市長は「今年は（花見川と新川がつながるきっかけの）開削工事から300年の節目。先人が残した価値を再発見したい」。八千代市の服部友則市長は「川は人を呼べる資源。このエリアを多くの人がにぎわって暮らせるまちに」と展望。佐倉市の西田三十五市長は「カヌーやカヤック、舟で八千代と佐倉が結びつき、千葉市まで行けるようになればと提案した。

朝日新聞　2月21日付

散歩・サイクリング・カヤック…

花見川・新川流域「遊び場」紹介

周辺3市と地元企業が連携

新川の前で「千葉うみさとライン」をPRする関係者＝八千代市

東京湾と印旛沼をつなぐ花見川と新川の流域一帯の魅力を高める取り組みとして、「千葉うみさとライン」プロジェクトが始まった。民間と行政が連携し、散歩やサイクリング、カヤックといった水辺の「遊び場」の楽しさを発信する。

対象エリアは、花見川の東京湾河口付近から西印旛沼周辺までの約30キロ。花見川千本桜緑地（千葉市）、新川千本桜（八千代市）、佐倉草ぶえの丘（佐倉市）などの観光スポットが点在し、サイクリングロードもつながっている。

各地域ごとにPRしていたイベントや魅力の発信は、川沿いの3市と地元企業などが協力していく。今月立ち上げたホームページでは花見情報などを紹介中で、4月に協議会が発足する。眺望を楽しむ「うみさとテラス」を用意し、キッチンカーで地元産の食材を使った料理を提供したり、ワークショップを開いたりする。

「千葉うみさとライン」は、海と里山の生活文化を川がつなぐという意味を込めた。コンセプトは「ちばの、ちかばの、あそびば」で、自然と暮らしが融合する大きな遊び場に見立てて周辺住民にとっての身近な存在をめざす。

事務局を務める地域おこし会社「みなも」（八千代市）の岩崎肇社長は「四季を通じて、人生を豊かに過ごせるイベントがうみさとライン沿いにはある。この地域に住んで良かったと感じてもらえるようにしたい」と話す。

（本田大次郎）

北総 / 佐倉 / 八千代よみうり「統合版」
2024 年 3 月 22 日付

官民協働で地域の魅力アップを！
印旛沼―東京湾の流域PR
「千葉うみさとライン」プロジェクト始動

印旛沼から新川、花見川を経て東京湾に至る流域を『千葉うみさとライン』と名付け、官民協働で魅力を高めようと、2月15日に佐倉市、千葉市、八千代市とUR都市機構、エリアマネジメント会社㈱みなもが連携協定を締結。4月1日に協議会が発足してプロジェクトが始動する。

協定は、桜やバラなどの花の名所が点在しサイクリングや釣り、カヤックなどが楽しめる流域を「自然と暮らしが融合する大きな遊び場」として内外にPR、連携イベントなどで訪れる人を増やし、住む人の暮らしも豊かにして地域への愛着と誇りの醸成を狙う。当面は東京湾～西印旛沼の約30kmが対象、将来は北印旛沼を経て利根川に至る全55・5kmに拡大する予定。

【千葉うみさとライン】

このプロジェクトは、佐倉市で生まれ育ち、郷土に深い愛着を持つ㈱みなも代表取締役の岩崎肇さんが水辺空間を生かしたまちづくりに取り組む日大理工学部の岡田智秀教授を招いて開いた勉強会やUR都市機構から地域ブランディングの提案があったことが発端。

岩崎さんは「桜やバラなど花のスポットをリンクさせて回遊してもらったり、3市共同のイベントや飲食提供のなかったスポットへキッチンカー等を配車することで、外から人を呼び込むだけでなく流域に住んでいながら訪れたことがなかった人にも憩いを感じてもらい地域を再評価していただけるのでは」と期待を語った。

左から酒井弘UR都市機構東京東・千葉地域本部長、神谷俊一千葉市長、西田三十五佐倉市長、服部友則八千代市長、岩崎肇㈱みなも代表取締役＝2月15日、やちよ農業交流センターでの記者会見で